

この動画はこんな時に！

トイレに入っているときにのぞかれた、おしりを触られた、という話を聞いた

子どもが、自分のお口ふきを友だちが勝手に使った、と訴えてきた

砂遊びや水遊びで、頻繁に着がえが始まるな

友だちが顔を近づけて話すのがイヤだ、と、人との距離を気にしている子がいるなあ



保護者の方から、「家で、友だちに〇〇されてイヤだと言っている」と報告を受けたけど、どうする？

動画といっしょにこんな遊びも

作成：山梨学院幼稚園 田村優子

活動案

くまたんに教えてあげよう！

～心のアラームが鳴るとき～

保育者とくまたん(パペット)による寸劇。
子どもたちは、くまたんが、
保育者の「心のアラーム」が鳴ることをしてしまうところを目撃する。
子どもたちは、保育者に助言したり、グループで、
自分たちの「心のアラーム」が鳴ることを考えたりして、
くまたんに、人によってさまざまな「心のアラーム」があることを教えていく。



ねらい

されてイヤなことは
一人ひとり違うこと、
イヤなことは伝えてよいことを知る。

対象

5歳児

保育者の役割

保育を進める役・
くまたん(パペット)役

環境

4～5人のグループを作り、
グループごとに一つの机に
座れるよう設定する。子ども
たちが日ごろ親しんでいる
パペットなどを使用する。

実践のポイント

POINT 01

プライベートパーツ以外では、いつ「心のアラーム」が鳴るかは、本人以外わかりません。だからこそ、他の人とは違う自分の「心のアラーム」を知り、他者に伝えることが、「互いをイヤなことから守るため」に必要な、ということに気づかせるのが、この活動のねらいです。

POINT 02

他人の「心のアラーム」への配慮を強調しすぎると、子どもたちの行動が委縮してしまうこともあります。まだ、本人も気づいていない「心のアラーム」について、配慮しすぎる必要はありません。



活動の流れとポイント

▶ 動画「あたりまえ認定～こころのアラーム」>

活動の流れ

保育者の関わりのポイント

動画を視聴する

動画の感想を聞き、振り返りをする

- 「アラームってね、怖いことやイヤなことを私たちに気づかせてくれる合図なのよ。」

くまたんの登場①

くまたんが突然やってきて、保育者の「心のアラーム」が鳴ること(おしりむにむに)をして去っていく

- 保育者は、くまたんの行為にギョっとする。
- 保育者は、「また、されたらどうしよう」と不安を口にする。子どもたちに相談する。

くまたんの登場②

- くまたんが再び、保育者のおしりを触ろうとする。
- 保育者は、くまたんに「やめて」と言う。
- くまたんは「喜ばせようと思った」と伝える。
- くまたんから子どもたちに、どんなときに「心のアラーム」が鳴るのか教えてほしいと頼む。
- くまたん、一旦退場する。

グループで「心のアラーム」が鳴ることを話し合う

- 保育者は各グループをまわって、どんな意見が出たか用紙に記録する。

くまたんの登場③

グループ内で出ている意見の一つを、くまたんが保育者や子どもたちに対して行う

- くまたんは悪気ない様子で行き、去る。
- 保育者は、子どもたちに、「心のアラーム」が鳴ったか確認する。
- もし次されたらどうしたらいいか、問いかける。
- くまたん再登場。同じことをしようとする。
- 子どもたちが、「やめて」と言う。
- くまたんは、悪気がなかったことを伝え、言われたらすぐやめて、謝る。

まとめをする

- くまたんに教えてあげながら、他のグループの意見をみんなで共有する。
- イヤだと感じることは、人それぞれあることを確認する。

「自分は楽しくても、誰かの「心のアラーム」が鳴ることがあるんだね。人にはわからないから、自分がイヤだと感じたら、きちんと伝えて自分を大切にできると素敵ですね。みんなの「心のアラーム」を知ると、きっと、みんなで、仲良く過ごすことができるよね。」

- 全員が見えやすい位置に座っているか確認する。

- 共感したり、応答したりして、楽しく振り返れるようにする。
- 「アラーム」をわかりやすい日本語に言い換える。

- くまたんを演じる保育者は、楽しそうに相手が喜んでいっているように表現する。
- 子どもたちが保育者の「心のアラーム」に気づけるよう、大きめに演技する。
- 「心のアラーム」が鳴ったときはどうしたらいいか、子どもたちにたずね、意見を引き出す。

- くまたんの行動にも理由があることを気づかせる。(くまたんを悪者にしない)
- くまたんを演じる保育者は、くまたんと進行役の保育者の感じ方の違いに戸惑う表情をする。

- 子どもたちの心の奥底にあった感情を引き出せるよう言葉をかけていく。
- 子どもたちから出たすべての「心のアラーム」を受容・共感する。

- 子どもの意見の中の一つを演じることで、「心のアラーム」が鳴る状況を体験的に感じとれるようにする。
- 子どもたちのイヤだと思った気持ちも、なんとも思わなかった気持ちも、両方受け止める。
- 感じ方は人それぞれであることを体験できるようにする。
- 子どもが自然と「やめて」と言えるように導く。

- 話し合いの中で子どもたちから出てきた「心のアラーム」を、くまたんに教えてあげられるようにする。
- 「やめて」と言うことは「自分を大切にすること」「お互いを大切にすること」につながっている、と感じられるようにする。

くまたんが行う「イヤなこと」の選び方ヒント

園の中で、実際に問題になっている行動を題材にするのもおすすめです。

くまたんの行為には、ポジティブな動機を設定し、くまたんを悪者にしません。悪気なくしたことが、実は、他の人にとっては「心のアラーム」が鳴ることもあるのだと、気づかせることが大切です。

“イヤなこと”が指し示す範囲は広いです。今回は、動画に出てきた「心のアラーム」と同様に、「体に関すること」から選ぶ方がわかりやすいでしょう。生理的に嫌悪感を抱くことなので、イヤである理由を言語化する必要はありません。

グループワークの中で子どもたちから出てきそうな、「心のアラームが鳴ること」「されたらイヤだと感じることを」事前に予想しておきます。P15の「くまたんの登場③」でどんなものを取り上げるか、事前に打ち合わせておくといいでしょう。

子どもたちから出てきそうな「心のアラーム」

髪の毛を触られる、急に手を触られる、顔を近づけられる、唾が飛ぶ、背中をぼんぼんされる、食べ物を触った手で触られる、他人が着た服を着る、そっへと撫でられる、など。

毎日の保育とのつながり

日常の保育の中で、「心のアラーム」について触れることは、どこの園もあまりなかったのではないのでしょうか。今回の実践を通して、子どもたちは「心のアラーム」があることを知ります。自分はどんなときに「心のアラーム」が鳴るか考えた子どもたちは、きっと、その後の生活の場面で、「心のアラーム」が鳴ったときには、気づくことができるでしょう。

“カバンを勝手に開けられたくない” “自分のものを人に使われたくない”など、社会性に関する「心のアラーム」も出てくるかもしれません。「イヤなこと」の幅を広げて、“何がいじわるになるか” “なにが暴力になるか”、について考えていくこともできます。日々の生活の中で、「心のアラーム」は、自分の心と体を守るために大切な信号であることを、繰り返し伝えていきたいですね。

「心のアラーム」を、より子どもたちのものとしていくために、例えば、子どもたちの「心のアラーム」を模造紙などに書き出し、保育室に掲示してみても？ 目に見える形にすることで、子どもの方から「先生！心のアラーム鳴ったよ」と教えてくれるようになるかもしれません。さらに、新たに発見された子どもたちの「心のアラーム」を追記していくこともできます。追記していくことで、「心のアラーム」が鳴ったことを伝えるのがあたりまえになったり、悪気がなくその行動をしてしまった子も、「あっ！イヤだったんだあ」と気づけるのではないのでしょうか。さらに、「心のアラーム」が鳴ることをしてしまった子がいたときには、叱るのではなく、子どもと共に考える機会にできるといいですね。

